

新枕崎駅舎のコンセプトは、「来てよかった、レトロ感溢れる癒しとパワーを感じる最南端の終着駅」。六角屋根にはステンドグラスが施され、駅舎内には乗客を見守る山幸彦像を設置。駅舎中心には最南端終着駅の到達ポイントとなる赤御影石が埋め込まれています。照明に裸電球を使用するなど、昔懐かしい雰囲気漂います。

なつて枕崎を離れることになって「も、こんな駅舎があるんだよ」と周りに誇れる駅舎になってもらいたいですね。そういったことを想いながら皆で設計しました」と話します。

駅舎内に一步踏み入ると、木のぬくもりと、六角屋根のステンドグラスから注がれる光が懐かしく、きつと新たな挑戦への力を与えてくれるでしょう。



県建築士会南薩支部の皆さん。左から四元廉宗さん、新屋敷幸隆さん、大工園昭則さん

枕崎駅舎建設は世界最先端の新しい公共のカタチ

「市民などからの寄附金や資材提供によって、まちの玄関口である駅を立派に作り上げた事例は、世界でも初めてとなる『新しい公共』のカタチだと思います」

こう話すのは、駅舎設計にあたり、アドバイザーとして協力した建築家で千葉大学工学部非常勤講師の川西康之さんです。今回、記念ロゴマークのデザインも手掛けました。

フランス国鉄での勤務経験を持つ川西さんは「ヨーロッパにおいて駅は、国が整備するもの」です。陸続きのヨーロッパで鉄道整備は国家の威信そのものなのです。そのため、駅舎には壮麗かつ

壮大な建築デザインが求められます。ところが枕崎は違う。枕崎市から鹿児島市へ行くのに鉄道は最も不便で遅い。このような中、駅をしっかりと整備しなきゃ」という市民の思いが一つに結実したことは、最先端の取り組みではないでしょうか」と話します。

また、市民一人ひとりができることから行動すること、そして枕崎にしかできないことの創造が必要と川西さんは言います。

「駅舎が完成したことによって観光客が増えるでしょう。しかし大事なものは、都会からの観光客に『枕崎はこんなに豊かで羨ましいでしょ』、ということを示すことだと思っています」

みんなの力を結集して作った駅舎に誇りを持ち、その気持ちを持ち続け、今後も携わっていくことが枕崎駅存在価値を高め、観光をはじめとした産業の発展にもつながっていきます。



建築家・千葉大学工学部非常勤講師 川西 康之さん

きれいな駅で皆さんを迎えたい

旧駅舎が取り壊しになってからの枕崎駅には、当初、駅ホームのほかには何もなかった状態でした。そのような中、観光客などに気持ちよく枕崎を訪れてもらおうと発足したのが「枕崎駅を想う会（積山ユミ子会長・写真左から2番目）」です。これまで花を植えたり、イルミネーションを

飾ったりと様々な活動をしてきました。「活動をとおり、少しずつ皆さんの注目が駅に向いてきたと思います。今回、市民の力が集結し、立派な駅舎が完成しました。私たちの活動が少しでも役に立ったのではないかと嬉しく思っています」と積山会長は笑顔で話していました。



枕崎駅を想う会のメンバー（駅舎建設前の枕崎駅にて）

レトロ感溢れる癒しの終着駅



①テープカットの様子 ②記念列車の到着をたくさんの市民が迎える ③かつお節行商に扮した商工会議所女性会メンバー ④枕崎駅完成記念入場券 ⑤出会いの広場のハート形の石 ⑥「枕崎鯉船人めしSP」の振る舞い ⑦出汁の王国・鹿児島プロジェクトによる列車内での鯉節削り体験 ⑧火の神乙女太鼓によるオープニング

かつお節行商の像 それは枕崎の力強さ

「山幸彦は、伝説上の人物で参考となるものがなかったため、よりかっこいい人」をイメージして作りました」と話す田原迫華さん。複数の男性をモデルにした山幸彦像は作者好みの「イケメン」。男性像をこれだけきちんとした形で作る機会はありません。田原迫さんにとって代表作になるような、最高傑作の男性像を作りたいという想いで山幸彦像は作られました。

また、「かつお節行商の像」については「黒島流れによって働き手を失った悲しみを乗り越えて、それでもたくましく生きていく女性をイメージしながら作りました」と話すように、母親の複雑な心境を表現するのにとっても苦勞したそうです。

母親の複雑さとは逆に、子どもの像は、お母さんと手をつないでいるだけですごく明るい表情になる「子どもならではの無邪気さ」が表現されています。

「これから、この像たちが列車に乗る子どもたちを見守り、また帰郷したときには、懐かしいと思えるような存在になってほしいです。鯉節の香りであるとか、

人の記憶に残るものは言葉ではないものが多い中で、そのビジュアル担当をこの像たちには担ってもらえればと思っていました。観光客にも『また会いたい』と思わせるような、皆さんに愛される像になってくれたら嬉しいですね」と話します。

「かつお節行商の像」は、数々の苦難を乗り越えてきた枕崎の力強さの象徴です。多くの人が集う枕崎駅に設置されることで、その気風は後世に引き継がれていきます。



山幸彦像 「かつお節行商の像」除幕式での田原迫さん(右から4人目)